Let's 持続可能な保育 2

認定こども園 こどもむら

子どもが元気な街は、持続可能な社会！

地域の子どもや保護者を支える施設を多数併設する、認定こども園こどもむら。保育を起点に街づくりにかかわっていく、その取り組みを紹介します。

「ここで子育てしたい」と思われる街を目指して

幼保連携型認定こども園のほか、小規模保育所、企業主導型保育所、学童保育所がある、認定こども園こどもむら。緑の多いこども園にはビオトープやツリーハウスなどがあり、子どもたちがのびのびとあそぶ姿が見られます。

でも、運営している施設はそれらに留まりません。子育て支援センター、マタニティサポート、小学生の勉強のサポートをする宿題カフェに、駄菓子屋まで！

それほどたくさんの施設を運営しているのはなぜなのでしょうか。

「とにかく子どもたちを大切に育てたい。これに尽きます」と理事長の柿沼平太郎さん。ここで言う「子どもたち」は園児に限りません。卒園して小学生になった子どもたちや、生まれる前の胎児も含まれています。

この「子どもを大切に育てたい」という思いの先には、「街が持続するように」という願いがあります。

「そもそも保育施設は、街に子どもがいなければ成り立ちません。たくさんの子どもが街に住み入園すれば、園運営や職員の生活が安定します。また、子どもがたくさんいるということは、つまり働き盛りの世帯が街にたくさんいるということでもあります。それは、街全体の活性化にもつながります。つまり、子どもがたくさんいれば、街は持続可能になると思うのです」。

この考えのもと、まず地域のすべての子どもが笑顔で過ごせるように、そして、子育て世代が「こんなふうに子どもを大切にする施設がある街なら、安心して住み続けられる」と思うようにと、数々の施設を運営するに至ったのです。

保育に携わる人の社会的地位を上げたい

こどもむらが、園運営だけの世界から飛び出したのにはもう一つ目的があります。それは、保育業界の社会的な地位を上げること。

「保育という職種は社会にとって欠かせないものなのに、残念ながら社会的地位が高いとは言えません。この地位をもっと上げるには、保育の質を高めていくのも大事なのですが、もう一つ大事なことは、保育に携わる人間が園の中だけで完結せず、もっと社会にかかわっていくことだと思います」と柿沼さん。マタニティサポートや、小学生の支援など、園児やその保護者に留まらない支援を積極的に行うのは、そうした理由もあるのです。

とはいえ、保育をしながら地域の子育て支援もするのは職員にとって負担が大きいので、園の保育と地域の子育て支援で、スタッフを分け、持ち回りで運営しているそう。マタニティサポートの施設に勤めたり、学童クラブに勤めたりする中で、子育て初心者の思いを知ったり、卒園後の子どもの育ちを知ったりと、職員のスキルアップにもつながっているそうです。

子どもを真ん中に活気づく大人たち

たくさんの施設を開いていく中で、園と地域のつながりもより広く、深くなっていきました。例えば一つの施設を開設するにも、地域の保健センターや行政機関、専門家などと話し合いをします。すると、そこでつながりができ、次に別の施設の構想が浮かんだときにも相談ができます。そのうち自治会長や区長などともつながり、「地域のお祭り、どうしよう？」「それなら、園のおやじの会がお手伝いできるかも」などと双方向でアイディアを出し合えるようになっていったそうです。

「園のおやじの会の活動は、もはや園に留まらず、『地域のおやじの会』と化しています。そうなると、おやじたちがかかわるのは自分の子どもやその友達だけでなく、地域中の子どもたちにまで広がります。おやじの会に限らず、つながったさまざまな機関や地域住民もそのように『地域の子育てをみんなでやろう』という雰囲気が出てきています」と柿沼さん。子どもが尊重され、子どもを真ん中に活気づく街づくりに、園の取り組みが一役買っています。

お話
柿沼平太郎さん
認定こども園こどもむら
理事長

取材・写真協力
認定こども園こどもむら
（埼玉県）

1975年、埼玉県久喜市に栗橋さくら幼稚園を設立。2012年に認定こども園こどもむらを設立したほか、学童クラブや児童向けの学習支援施設も運営し、地域の幅広い年齢の子どもたちを見守っている。

遊具やウサギ小屋など、園の設備を手作りしてくれる「おやじの会」には、子どもの卒園後も活動を続ける保護者の姿も。

職員の「働きがい」やプライベートも大切。休み時間はしっかりと休息できるよう、ゆったりとした休憩スペースを設けている。

Let's
持続可能な保育
2 認定こども園
こどもむら

地域の人々が集うコミュニティ 拝見！こどもの“むら“

赤ちゃんや小学生、妊婦、地域住民などさまざまな人々が集うこどもむら。それぞれの施設で、子どもを中心に地域がつながる様子を紹介します。

File 1

駄菓子屋

スクールカウンセラーに相談に行くのは難しくても、10円玉一つあれば、買い物という名目で誰かに相談することもできるかもしれない……。不登校の子や、家庭に居場所のない子のための居場所をつくりたい、という思いから設立したのが駄菓子屋「むすび堂」だ。店に立つのは、保護者でも教師でもない、地域に住む「第三の大人」たち。卒園児もよく訪れるので、園の職員にとっては、園児たちのその後の様子を見られる場でもあるのだそう。

File 2

宿題カフェ

別名を「寺子屋ハウス」としているように、小学生が勉強をしたりあそんだりする施設。条件が合わず学童クラブに入れなかったり、家庭で勉強を見てもらう時間がなかったり、基礎学力を身につけたいが学習塾に通えなかったりと、さまざまな理由で小学生が訪れている。「宿題がちゃんとできれば、基礎学力もつくし、自己肯定感も高まる。小学校時代に子どもが自信をなくすことがないよう、支えたい」と柿沼さん。勉強を見てくれるのは、元小学校教員。地域の小学校や教育委員会とのつながりを通して、定年退職後の小学校教員を紹介してもらえるという。

File 3

子育て世代が語り合えるカフェ

駄菓子屋「むすび堂」が子どものためのカフェなら、こちらは子育て世代の大人たちが集えるカフェ。子育て支援センターなどを訪れたあと、子連れでも安心してのんびりと過ごしつつ、保護者同士がつながる場になるようにと、店内には玩具も置かれ、あそべるコーナーも充実。

File 4

家庭訪問型の子育て支援

「本当に子育てに行き詰まっている人は、子育て支援センターに来ることさえできない」という気づきから始めた、家庭訪問型の子育て支援「ホームスタート」。「虐待まではいかないけれど……？」という危険信号の家庭を見守る機能もあり、万が一の場合は行政につなぐことができるような協力体制も整っている。

File 5

マタニティ専門の子育て支援

乳幼児の子育て支援センターとは別に、産前産後の支援施設として「にじいろのおうち」も併設。子育てや料理などに関する講座を開きつつ、おもに妊婦が気軽に相談できる場となっている。「最近は、近隣に知り合いも少なく、不安な気持ちをもつ妊婦さんが多いです。誰にも相談できず、インターネットで調べると、かえって不安が増すばかりです。お腹が大きいうちに頼れる場所を見つけてもらうことで、出産後の混乱も起きにくくなるはず」と柿沼さん。

すべての施設が、自分一人で悩まないための「居場所づくり」の場。「一人じゃないんだ」とみんなが思えることが、街の潤いにもつながるのだと思います

特集で取材した皆さんに、
「今日からできるSDGs」について、
聞きました！

SDGsが目指すGOALに向かって……

今日からできることは？

冨田久枝さん

（千葉大学教育学部特命教授）

自然の恵みに感謝し、互いに支え合う……日本人が本来もっていた文化そのものが、持続可能性につながります。まずは私たち大人が、食習慣など日々の生活を大切に、丁寧に過ごしていきたいですね。

柿沼平太郎さん

（認定こども園こどもむら理事長）

いまの社会課題に対して興味をもち行動していくのは、私たち大人の義務。保育者としては、子どもたちがいつか持続可能な社会を形成できる大人になるよう、全力で保育をすること。これに尽きますね！

高橋真樹さん

（ノンフィクションライター）

SDGsにつながる商品を買うことだって、持続可能な社会への大事な一歩！　その商品の背景にある労働、資源、エネルギーについて考えれば、また一歩。一人一人の「一歩」が社会を変えていくと思います。

内野彰裕さん

（東京ゆりかご幼稚園園長）

とにかく体験！　自然や人とのリアルなかかわりを重ねることこそ、SDGsを「頭」ではなく「体」で理解する近道。そしてそれは、子どもはもちろん、私たち保育者にこそ必要なのではないでしょうか。

Let's SDGs!
持続可能な保育

2022年4月号から、
連載「Let's SDGs!
持続可能な保育」が始まるよ！
地球のため、子どもたちの未来のため、
これからも一緒に考えていこう！